

## ● 四国短歌大会講演

## 白秋の写生



田谷 鋭

(たや えい)

平成十一年二月十三日(土)、早春の高知城ホールで「四国短歌大会」が行われ、田谷鋭先生の「白秋の写生」と題するお話をお話を伺いました。北原白秋という優れた歌人がどのような運命を生き、どのようにしてその歌境を拓いたのかに触れて、印象深いお話でした。

## \* 若き日の白秋

「白秋の写生」というのはちょっと変わった題のように思われるでしょうけれども、北原白秋は独自の写生の仕方をしておりまして、そのところをお話したいと思えます。初期はそうではなかったんですね。「桐の花」というのが大正二年に刊行されておりますけれども、これはロマンチック。春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕

『桐の花』の最初の歌でして、たいていの方はご存じなんですけれども、「春の鳥よ、鳴くな、鳴くな」と言っているんです。「あかあかと外の草原の果てに、日が沈む夕べである」と言っているんですが、学者などは「この鳥は鳴いているのか鳴いていないのかわからない」と批評しております。つまり、鳴きしきる鳥に「鳴くな、鳴くな」と言っているのか、あるいは春の夕べの静かさの中で鳥も鳴いてくれるなど言っているのかわからないという二通りの批評が出る

ております。私はやはり、鳴いていると見た方がいいと思うんです。鳴いている鳥に「しばし静かにしてくれよ」というその方が面白と思うんですが、作者は実は「な鳴きそ鳴きそ」という言葉が面白から作ったんじゃないかと思うわけです。「桐の花」という歌集は、白秋という人が柳河から東京に出てきまして、早稲田の予科に通いながら東京の中の西歐的な世界、それと東京に残っている江戸的な世界の両方を受け取って、盛んに詩作し、歌も作った時代なんです。その中で日本語の面白さ、「鳴くな、鳴くな」というのを「なりそ」の係り結びで、「な鳴きそ鳴きそ」というのが面白かったのです。

君かへす朝の鋪石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

白秋の作品の人気投票でたしか第一位だったと思います。清らかな感じとともに別れのひとつの情景が出ているわけですが、「君」というのは、昔から女の人が男に対して言う言葉なんですけれども、この場合は白秋は男ですから、女の人が帰ったと見るべきでしょうか。しかし、ちょっと穏や

かならぬ感じがしますから、白秋自身を女性のようにみなして、男の人が帰っていくとするとびったりなんですね。白秋は女性に仮託して歌っているんじゃないかと私は思っています。

そんなわけでこの辺りには、まだ写生の面影は見えないんですが、後年の作品になりますと、これは写生の歌ですね。

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見居りその揺るる枝を

まだ飛び慣れない雀の子供が、試みに飛ぶ。「宙にためらふ雀の子」と言っていますね。自分が飛び立った枝を見ている。うまく飛べなかつたら、そこへ戻らなくてはな



らないからです。克明な写実の歌です。

飛びあがり宙に羽たたく雀の子声立ててて還るその揺るる枝に

今度は帰るときの状態ですね。雀は親の跳び方を見よう見まねで飛んでみた。飛び立った枝が揺れている、その枝に帰ってふつと安心する。その感じを歌っているんですね。一瞬一瞬が克明に歌われておりますね。このような作者の変化があり、そこが問題ですけれども、実はその前に大変な事件が起こります。隣に住んでいる松下俊子との恋愛が「詩人白秋告訴さる」という大きな新聞記事に出ています。白秋は当時は詩人第一の詩人だったのですけれども、市ヶ谷の未決刑務所に入らなければならなくなり、歌集の出版が一時頓挫してしまいます。

その頃の白秋は「短歌は緑の古い宝玉である」と考えていたのです。日本的な奥ゆかしい、歌集を意図していたと思えます。こののち作者は一大決心をして、牢獄の歌も歌集に入れることになるんですね。「哀傷篇」というのですが、収容されたときの歌を入れます。

私は十六歳ぐらいのときにこの『桐の花』を読んだのですが、素敵な歌集だなぁと思いつつ、その「哀傷篇」だけは気に入らなかつたんです。なぜ気に入らないかというと美しくないんですね。牢獄の中のうめき声とかというものも歌ってあるし、私はあまり読まなかつたのですけれども、しかし未決の監獄生活の作品を入れたことは、大きな意味を持つてくるのではないかとのちのち私も考えるようになりました。

この罪の結果は免訴ということになるんです。初めから事件はなかつたものとして扱われる。そうなるには、白秋の弟の鉄雄さんという方の尽力があり、再び世の中に出るのですが、作者の思想というのは大きく変わってしまったわけです。

東京の江戸情緒、東京の西洋っぽさ、銀座の灯、銀座の雨、あるいは大川端の情景とかいうものを、詩にも歌にも作っていたのが、ものを見る目が変わらざるを得なくなりません。詩人としての輝く位置からほとんど滑り落ちたようになってしまふのです。その後、離婚された俊子と行き会って結婚し、そして三浦三崎の方にまいます。

そこでしばらく暮らしたりするんですが不思議に白秋が逃れていくのは海に関係したところですよ。三浦三崎へ行く前でしたか、木更津へ行く船の中で、直木三十五に「白秋先生じゃないですか」とあいさつされたという事実があります。三浦三崎の生活から一転して、小笠原の父島へまいります。当時の父島というのは、本当に絶海の孤島という感じではなかったでしょうか。そこへ俊子と、俊子の友人である女性、この人が病氣療養をかねて一緒に行くんですが、やがて小笠原の生活に俊子が耐えられなくなるんですね。俊子は友達とともに引き揚げてしまう。その後白秋はしばらく小笠原の父島にいるわけですが、やがて帰ってくる。俊子とは別れたくないんですけども、別れざるを得ないという感じで別れていくわけです。

世間知らずで牢獄まで体験するようになり、世の中のことをわからなかったんだとも思い、生きていくために何を基本にしたらいいかを知ろうと志すのです。小笠原の体験や三浦三崎の体験を『白金之独楽』という詩集に残しています。日のさんさんと

降る海岸で自分の手のひらに、金の仏がいるといふ詩が残っております。

光り輝くてのひらに、金の仏ぞおはすなれ／光り輝くてのひらに、はつと思へば  
仏なし／光り輝くてのひらを、打ち返してぞ日もすがら

いい詩だと思いますね。つまり、自分の手、何もない手だけれども、こうして見ると、あるとき阿弥陀如来みたいな小さな金の仏がいらっしゃるような気がする。そう思ってはつとすると、もういない。さっきのは本当だったかなと見る。そういう自己凝視の生活をしてくるわけです。

彼のたどりついた詩作の世界というのは、結局、汎神論というのがありますけれども、世の中のすべては神的存在であるという、宗教的ではないんですけれども、存在を尊ぶという観念になってくる。そのところが面白いわけです。父母に愛育されて育った。ところが社会へ出て、ひとつのつまりきをした。そういう自分もどかしく、生き直さなくてはいけない、そう思われたんじゃないでしょうか。

#### \* 写生のはじまり

そういう目で、今度は新しくものを見て、歌を作ること始めた。さっきの『雀の卵』の二首などは、その写実的な発端となる作品なんです。作者の歌というのは、最初は、別に写実を心がけてはいなかった。しかし、自分というものの存在をどのように掴んだらいいのか、これからどう生きていったらいいのか突き詰めて考えたのだと思います。こういう写生の始まりというのは、ごく珍しいんじゃないかと思えます。同じ写生でも、正岡子規の系統の写生というのは、相手と自分、対象と自己、それを同じ価値に見て、十分観察して歌うということになります。白秋はちよつと違う。つまり、対象を尊敬している。『雀の生活』という、大変厚い本も発刊されるのですが、そこには雀がどのような動物であるか、よく書かれております。「雀はざる賢い」というんですね。そして、「人間を恐れてばかりいる」などと。

『雀の卵』という歌集は、ちよつとおくれで出ます。初めのうちはロマン的な詩人で



あった白秋が、途中から写真、写生の歌人になりつつある。彼の立場というの微妙でして、斎藤茂吉ですと医師という立場、それから歌人であるという立場ですね。白秋は詩人であるという立場です。むしろ国民詩人と言っているような立場ですから、注文があれば詩を作るというようなことをしてもいいました。詩を作りながら歌を作るというのはなかなか大変なことだと思っただすけれども、中年以降はむしろ短歌の方に強く心ひかれて、そこに自分の気持ちを

傾けていったような形跡があります。

白秋の写生の始まりは、対象をただ対象として見るだけではなくて、対象の中に自分を溶け込ませていくようになっていく。これは『雀の卵』だけではなくて、後年の歌集『白南風』なんかもそうですね。本当

にいいねいな写生の歌が主となっておりますけれども、その歌の中に、感情移入という言葉ではちょっと弱いんですけれども、

自分自身がそのものになりきったような感じで歌う、そういう作が非常に多いですね。雀、鳥とかいうものに感情を入れる。しかし、感情移入という言葉では少し足りない。

対象と自分がある融和した関係を持つということでしよう。英語辞典を引いてみますと、融和という意味では二つ書いてあるのですが、その一つに「ハーモニー」とあります。これは音楽用語としてよく知られております。「ハーモニー」というのがいちばんぴったりするんじゃないか。白秋と対象は、常にハーモニーの形を保っていると感じた方がいいと思うんですね。

『白南風』は、昭和九年に出しておりますけれども、翌年の十年に、白秋は「多磨」という雑誌を始めます。この雑誌は、それから七年ほどで白秋が亡くなり、さらに十年後、創刊から十七年経って終刊になってしまっただす。白秋が亡くなったのは昭和十七年十一月二日ですけれども、その間はこの雑誌で活躍する。

この雑誌で活躍する。『白南風』は、昭和九年に出しておりますけれども、翌年の十年に、白秋は「多磨」という雑誌を始めます。この雑誌は、それから七年ほどで白秋が亡くなり、さらに十年後、創刊から十七年経って終刊になってしまっただす。白秋が亡くなったのは昭和十七年十一月二日ですけれども、その間はこの雑誌で活躍する。

朴の花白く群がる夜明けがたひむがしの空に雷はとどろく

これは、東京の谷中の天王寺というお寺の近くに移った、大正十五年ごろの作品ですね。

この朴の花の歌を作るのに、夜明けがたに見ているんですね。朴の花は墓地にあっただようですけれども、作者はまだ夜明けにならないうちに墓地へ行ったようです。早朝の墓地は気持ちがよくないんじゃないかと思うんですけれども、努力をしていると思いますね。夜が明けると朴の木の梢に白い花が群がるように見えている。それが「朴の花白く群がる夜明けがた」で、「ひむがしの空に雷はとどろく」と続きますが、こうなってくるともう写生ではないような感じで、むしろ象徴的な世界になってきたと思います。

墓地の中を散歩するという詩もあります。「墓地はよき森、よき廊下」とかと言って歌っております。克明に墓碑なんかを見て歩いて、白秋という人の墓を発見するんですね。たしか「若目田白秋」という勤王の志士かなんかの墓を発見して、「白秋の墓があった」と非常に喜ぶんですね。ちよつと子供っぽいんでしょうけれども、子供っぽさは詩人にとっては必要な条件ではないかと思えますね。「朴の花白く群がる夜明けがたひむがしの空に雷はとどろく」は、象徴的な歌ですね。白秋の写生の道は、一つのハーモニーを奏でながら、そのハーモニーを崩すことなく、やがて象徴の世界に入ってくるのです。でも、作者は象徴ということとはあまりおっしゃらなかったですね。いろいろな講話の中でも、あっさりと言われっております。

**\* 白秋の象徴性**

私が白秋に触れたのは、白秋がすでに腎臓病やその他の余病でお目が悪くなつて黒眼鏡をかけておられたころでした。黒眼鏡のまま歌会に出ている人の顔を見渡します。



私の方をご覧になったように思つて、ちよつとうれしかつた記憶がありますけれど。谷中の墓地の作と思われるもう一首は、大変重みのある歌です。

**金輪際夜闇に根生ふ姿なり五重の塔は立てりけるかも**

「金輪際」絶対に動かないぞという感じの言葉ですね。夜の闇を「夜闇」と言っております。そこに根が生えているような形だというのが、この上句です。そして、「五重の塔は立てりけるかも」と単純に言つてお

ります。五重の塔の重みとか、それを作つた匠の心とかというものまで伝えてくる感じですね。幸田露伴の『五重塔』そっくりな感じがしますね。先輩の棟梁をしのいで五重の塔の建立を任せられた若い大王が、雨風の荒ぶ中で自分の塔を見に行く。自分の塔は絶対に倒れないという自信があつて、五重の塔を雨の中で眺め上げるという、幸田露伴の小説がありますね。あれを思わすような作品です。

「金輪際動かない」というように使う言葉です。それから「夜闇に根生ふ」と言っています。数百年を経た大木のような、根がしっかりと倒れない。こうなると象徴的な感じもするし、一編の小説に匹敵するような感じもする。何とも言いがたいよさを持つ作品です。

さまざまな形でご自分の写実の形を進めたいということができると思っていますね。

**ニコライ堂の夜揺りかへり鳴る鐘の大ききあり小ききあり小ききあり大ききあり**

これは、目の病いが深まつていった時期の歌集『黒檜』の中に見えるものです。これはクリスマス前の日じゃないかと思いま



すけれども、作者はそのとき近くの病院に入院しております。「ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の」と言つて、さながら鐘の音が自分の体から出るような表現をしております。綱を体ごと打ち振ると、高いところで鐘が鳴るんだけれども、大きな鐘と小さな鐘と、こもこもに鳴るようですね。「鳴る鐘の」と言つて、「音」ということは言っていないんですね。しかし、全体から感じられるのは音なんです。

ここには目というものに頼れなくなつて耳に聞き止めた世界を具体的に歌つてゆく作者がいます。そのときに韻律を大事にして、作品自体が鐘の響きのようになっていく点に注意したいと思います。

白秋は、自分の作つた歌を黙読してみると、頭の中で音が響くだろう。その音で歌を直していくのだと言つています。頭の中に響く音が騒がしかったり、よくない音に聞こえるものを綴り合わせてはだめだと言つています。言葉に出してもいいじゃないかと言いたくなるんですけれども、言葉に出すと、微妙な感じが消えてしまうというのを別のところで言っております。頭の中

に響く韻律というのを考えたいだくと、だんだんわかつてくると思いますけどね。

そのような作者の考え方が、目が悪くなるという状況の中でなし遂げられたことは、大きな歩みであつたと思います。作者は病気になるりましたが、愚痴のようなことは言つておりません。作品でも嘆いておりません。病室に友達が花を持ってきてくれる。

その花を窓際のつぼにさしてある。それがおぼろに見えるという歌とか、尋ねてくる方には画家の方もあるし、歌人の方もいる。

いろいろな人がくる。身近なものを克明に写生して歌つておりますね。病人の使うガラスの吸い飲みというのがありますね。そこにガーゼがかけてある。そのガーゼが日を経て汚れてきて、しわが多くなつたという歌があつて、大変細やかで、私はそれもいい歌だと思つています。

このごろ考えるんですが、私も高年齢になつて、たとえば人間というものは変わらないものとか、変えることができないものとかという考えをちよつと改めるようになりまして。人間は変え得るんだと。自分自身も変え得るんだというふうに思うよ

うになりました、これは自分ながら面白いことだと思ふんです。白秋が自分を変えたかどうかということは確かには言えないですね。しかしやつぱり市ヶ谷の未決を出てから自分を変えようとしたことは確かですね。

この世に生きていて、短歌を作るということは良いことなのですが、短歌だけではちよつとという感じもこのごろ持ちます。短歌プラス何かというのを考えて、それによつて新しい現実に触れてゆくことが必要じゃないでしょうか。短歌だけを一生懸命にやると、堂々巡りの世界に入つてしまうんじゃないかということをごころ考へております。時代が新しくなつてきますと、「新しい酒は新しい革袋へ」ということわざが生きてくる感じですよ。

北原白秋の晩年は目が悪くなつて、ほとんど盲目の世界でした。我々は自分の世界で頑張つていかなくちやならないわけですが、白秋の築いた世界、歩んだ道というのを一度振り返つていただくと、何か得るところがあるように思います。

ご静聴ありがとうございます。(拍手)